

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	張 詩雋
論文題目	宗教美術の身体美学：チベット・タンカの人類学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究の目的は、チベット・タンカ (Tibetan thangka) というチベット文化圏で広く制作されている宗教美術品を対象に、従来の仏教美術やタンカ研究が重視してきた図像学にもとづく分析を、身体美学 (corporetics) という概念から再検討することである。本研究のもうひとつの目的は、タンカが置かれた社会的な文脈を明らかにすることで、チベット (以下、中国の西藏自治区を限定的に指す場合は西藏と表記) の人々が対峙している現代的な状況とジレンマを民族誌的に記述することである。</p> <p>序論では、人類学におけるモノ研究、タンカ研究、近代チベットをめぐる表象を振りかえり、本論文の理論的な視座を示した。第一に、モノにエージェンシーを認め、それによって生まれる社会関係に着目する「関係論的なアプローチ」を評価しつつ、そこで等閑視されているモノの身体美学的な側面の重要性を指摘した。また、チベットの先行研究で陥りがちであった、チベットの近代を「漢化」／「西洋化」の二元論で捉える視点を批判し、人類学の立場からタンカの商品化に翻弄される絵師たちの動態を「近代の模倣」として捉える視座を示した。さらに調査と調査地の概要、論文の構成を示し、二部構成から成る本論が続く。</p> <p>第Ⅰ部では、タンカの身体美学について論じている。第1章では、チベット研究に関連する重要な概念、西藏の自然、歴史、宗教を紹介し、タンカを生み出す西藏という場所、そしてその中心地ラサについて記述した。</p> <p>第2章は、タンカの様式を分析した。タンカは壁画、彫刻、経文、仏塔とともにチベット仏教美術のジャンルに属する。チベット仏教美術制作では、共通の比率、顔料、装飾模様の様式を示した度量経 (チベット語でthig tshad) が用いられることで様式美が担保される。本論文ではこの様式に加えて、ピニーがヒンドゥー教のイコンを例に提示した演劇性 (theatricality) と没入性 (absorptivity) という側面が、タンカの身体美学にも欠かせない様式上の特徴であることを指摘した。</p> <p>第3章ではタンカの制作過程を検討した。まずタンカをめぐる重視される功德という概念について説明した。次にラサ市のタンカ制作所で日々行われる制作・学習実践、宗教実践を記述し、タンカ制作の3つの特徴、1) 度量経では不可量な経験や技術、人間関係の重要性、2) 唾液などの身体物質を顔料に混ぜること、3) 絵師の身体実践の重要性、を指摘した。</p> <p>第4章ではタンカを用いた宗教実践の場に注目した。観想用のタンカは、タンカのもつ功德を蓄積する道具である。一方で、加持儀礼に登場する「超度像タンカ」や「供養タンカ」のように、情動を喚起する視覚上の美や類似性が求められることもある。また、ショトン祭りのタンカ開帳儀式で用いられる巨大なタンカでは、参加者の視覚を超えた感覚が動員される。このように、タンカは多様な効果を発揮しつつ人々の生活に根ざしている。</p> <p>第Ⅱ部では、タンカの身体美学の変容を、西藏の近代的な社会変化を通して考察している。第5章では、西藏の近代化の歴史、ラサにおける近代芸術運動を、現地資料や人々の語りをもとに描き出した。西洋近代の諸概念 (「近代化」「産業化」「伝統」</p>			

「文化」「無形文化遺産」など)が中国や西藏で再文脈化される際、別の意味が付け加わる。西藏の近代化は、現地の社会で多様に解釈された近代に関する諸概念と、外部社会が与えるチベット像をもとにして行われた模擬(simulation)なのである。

第6章はタンカの近代的な変化について、タンカの産業化や非物質文化遺産登録のプロジェクトから考察した。国家や地域の行政側、一部の絵師が主導するこれらのプロジェクトは、標準化されたタンカや、「传承人」「民族芸術家」と化したタンカ絵師を生んでいる。タンカは今や「中華民族の文化宝庫」として、国家のイデオロギーを喧伝する政治的な道具になりつつある。この場合、タンカの身体美学は軽視される傾向にある。しかし展示場のタンカがもつ様式美によって、タンカは観る者に多様な思いとつながりを創出し、託されたイデオロギーからはみ出るモノとなっている。

第7章では、近代におけるタンカのもう一つの変化として、タンカの芸術化について考察した。近代西洋で誕生した芸術概念からその再生産の過程までが、現在タンカの商品化に大きな影響を与えている。かつては人々の日常生活に根ざしていたタンカだが、一部の絵師はタンカをハイカルチャーとして売り出し、アーティストとしてグローバルに活躍し、タンカはオークションで売買される文化資本となっている現状を指摘した。

第8章では、タンカの産業化、非物質文化遺産化、芸術化といった現代的なトレンドに乗り遅れた絵師たちの現在を、彼らのライフストーリーを通して記述した。「華やかなタンカ産業」「豊かなチベット」という近代像の影にある部分を示すことで、西藏の人々が対峙している葛藤について論じた。

結論である第9章では、本論の議論を改めて整理し、身体美学への着目が、芸術の人類学的研究への理論的貢献のみならず、現代チベット社会の理解においても重要である点を指摘した。タンカの制作は図像学の規則に依拠しているが、実際の制作現場では、神仏・師匠の模倣によって得られる技術と経験、身体物質を介して形成される相互交渉的な人とモノの関係など、不可量の部分がタンカの身体美学をなしていた。また、儀礼祭典の実施を通して、タンカは人の感覚、記憶、経験と深く連動しながら人々を魅了している。現代の絵師やタンカの関係者は「近代化」「文化遺産」「芸術」のイメージを模擬しつつ、様々な新しいイメージのもとで「タンカ芸術」という枠組みを生み出している。こうして作りだされた近代の模擬としてのタンカもまた、身体・感覚にはたらきかけることで、タンカの身体美学を更新し続けていることを指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

申請論文は、チベット文化圏で制作されてきたタンカという宗教美術品を対象にした文化人類学的研究である。申請者の主眼は、タンカの変容とそれを受容するチベットの人々の相互関係を通して、現代チベット社会を形成している動態を記述するところにある。

宗教美術品としてのタンカは、度量経という11世紀頃にインドからチベット（以下では、中国西藏自治区を限定的に指す場合は西藏と表記）に伝来した宗教美術に関する経文に定められた形式に厳密に基づき、制作される。従来のタンカに関する研究は、この度量経やタンカの形式の歴史的な変遷など、美術史的な研究が主なものであった。しかしタンカを制作したり祈祷に用いたりする実践は、単に「功德を積む」といった宗教的な意味や度量経の遵守によって生まれる様式美の産出にとどまらない。本論文では、同じ形式でもタンカが見る者にはたらきかける演劇的な要素や、タンカを生み出す絵師たちやそれを崇拝する信者たちの身体を用いた実践の重要性を明らかにしている。この被調査者、調査者の身体を含めて把捉される「生の不可量部分」は、民族誌の核となるものであるにもかかわらず、これまで明確に焦点化されてはこなかった。この部分にアプローチした研究として、申請者の論文は優れた民族誌としての価値をもっている。

あるいはこれを、タンカというモノがもつエージェンシーとして考えることもできるだろう。モノを媒介にして生まれる人々の実践やネットワークを、モノが発動するエージェンシーとして考察する「関係論的」視点は、近年の人類学的な研究の主要なアプローチのひとつであり、本論文もその潮流に位置づけられる。モノを中心に世界を捉える視点は、モノを人間が使う単なる道具や象徴的な意味の乗り物として捉える「意味論的」な視点に対する批判から生まれている。しかしいずれの視点でも、特定のモノがなぜ人々を魅了するのか、という問いに正面から答えているとはいえない。本論文では、モノが人々にはたらきかける力を、身体美学として考察している。すなわち、モノはそれに対峙する人々の身体を通して感受され、感覚や情動を通して人々の心に作用している。本論文のこの指摘は、文化人類学におけるモノ研究に大きな示唆を与えるものであり、近年注目を集めている感覚や情動に関する文化人類学的研究の最新の動向にも連なる視点を提示している。

タンカが身体感覚を通して人々にはたらきかける力について考察した本論文第Ⅰ部に対して、第Ⅱ部では近代化の波を受けて変容するタンカの身体美学的な価値とタンカ絵師たちを取り巻く環境について考察している。タンカやそれを生み出す絵師たちは、外部社会が憧憬する精神世界としてのチベット像を背負う一方で、中国の文化産業の一環として国家イデオロギーをも担う存在になりつつある。このなかでタンカは、信仰や伝統とともにある日常生活から切り離され、標準化や大量生産が見込まれた商品となり、まさに漢化と西洋化のはざままで揺れ動くチベットを体現している。絵師たちは西洋人や漢人がもつ「チベットらしさ」に関連するイメージを模擬しながら、オークションで売買されるアート作品や国家が指定する非物質文化遺産としてタ

ンカを創出しはじめています。これを本論文では「近代の模倣」と呼んでいる。自らに期待されるところのイメージを模倣的に再生産することで新たな生存の場を創造するやり方は、マイノリティの生存戦術ともいえるものだが、本論文の要は、その戦術が徹底していないことを指摘した点にある。ここでは、「強い」はずの国家や外部社会の期待や政策も、絵師たちの「模倣」も、モノであるタンカを介しては当初の目論見が完遂するとは限らない脆弱なものであることが示される。絵師たちに評価される「妙技」をもつ絵師と非物質文化遺産の伝承者とは一致しない。展示会で展示されるタンカは、政治的なイデオロギーとは別に、個人の多様な解釈や好みによって売買される。タンカ制作の本場であるラサは、アーティストを目指す絵師たちを惹きつけるとともに、実現しなかった夢を抱える絵師たちを結果的にチベット各地に回遊させる。そうした近代化そのものが内包する矛盾やほころびこそが、逆説的に近代化の駆動力となっており、さらにその枠組みの中で「タンカ芸術」という新たな様式が誕生している状況を精査した本論文は、タンカを通して西藏の近代化を活写するものとなっている。

本論文では、タンカを取り巻く歴史・政治・経済的な状況をおさえることで、タンカの身体美学をタンカや西藏に内在するものとしてではなく、マクロでグローバルな社会関係のなかに位置づけて描き出しており、チベット社会研究として高く評価できる。確かに「近代の模倣」の理論的な射程はなお曖昧である。ポストモダン状況の模倣にあっては、主体の位置は模倣的な行為によって後づけの形で生成するが、本論文における近代チベット社会に生きる絵師たちやタンカの購買者といった主体の位置づけはさらに分析を必要とするであろう。また絵師たちが近代チベット像を模倣する状況下でのタンカの身体美学の変容についても、さらに踏み込んだ記述がほしいところではある。しかしながら、全体としては丁寧な現地調査にもとづき、貴重な論点と資料を提示した点はその欠点を補って余りある。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年7月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、申請者からの確かな応答と修正の意向が示されたため、本論文を合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 3 年 12 月 1 日 以降